

企画 1

CRC のワークライフバランス

座長：友竹 千恵（社団法人日本看護協会 看護教育研究センター 教育研究部）
森下 典子（国立病院機構大阪医療センター 臨床研究センター 臨床研究推進室）

1. 仕事と育児の両立

小野 恭子（国立病院機構大阪医療センター）

2. CRC のワークライフバランス—様々な医療機関で働く CRC—

柴田 嘉恵（株式会社エスメディサ）

3. 仕事と趣味の両立を目指す

中山 洋子（神奈川県立がんセンター 治験管理室）

4. CRC のワークライフバランス 管理者としての視点から

中村 直子（国立がんセンター中央病院 看護部/臨床試験・治療開発部）

CRC は臨床研究の推進を語るうえで欠くことができない存在であり、「新たな治験活性化 5 カ年計画」ではさらに3,000 人の CRC 養成計画が明確に打ち出されている。その一方で CRC 業務を担っているのは女性が多いことから結婚、出産、育児あるいは介護などを機に退職や休職を余儀なくされるケースや、逆に仕事漬けで慢性疲労を抱えて離職するなど、CRC の定着率を阻害する要因になっているのではないかと推測される。解決策がすぐには難しい問題もあるが、見方を少しかえるだけで解決できる問題も顕在しているように思われる。そこで、生き活きと遣り甲斐をもって

仕事に臨んでいる CRC にどのようなワークライフバランスを考え、実践しているのかを紹介してもらい、CRC 同士が共有し自己を振り返る機会にしたいと考え、本セッションを企画した。

3 人の乳幼児の育児に追われながらも家族の協力を得て、母としてだけではなく自分の人生も大切にしていきたいという発表、SMO の CRC からは企業人としての側面や院内 CRC との協働に時には悩みながらも、そこで得られる経験はすべて自分の財産という発想の転換力、マラソンが趣味の CRC からはマラソンが仕事（自分）にもたらしてくれる効果の紹介と、趣味との両立のための日ごころからのちょっとした仕事の工夫や心構えなどは今すぐにでも取り入れてみたい内容であった。最後に管理職の立場から、問題が出てきたときには本質を見極めることが大切という厳しくも温かいメッセージがあり、一人で抱え込む前に上司に報告し相談することをきちんとできていただろうか、という普段の姿勢を振り返る良い機会になったのではないかと思う。

ワークライフバランスは、「仕事と生活の調和」であり、人生という長い時間の中で「仕事」「自分」「人間関係」「社会貢献」の4つを保つことによって人生を充実させていこうという概念である。まさに CRC はこの4つを行き来し実践することができるダイナミックかつ繊細な仕事である。「人（患者）を受容」しより良いケアを提供するために、CRC は前向きに自己研鑽を積むのであるが、自分に厳しくするばかりではなく、時に「自分も受容」しご褒美も必要であること、そして周囲への感謝をいつも忘れないこと、という演者の方々からの共通のメッセージが印象的であった。

フロアには男性やお子様連れの方と思ったよりも幅広い層からの参加があった。それぞれが色々な病院、色々な立場で臨床研究を支援し、被験者の倫理を守るために働いている。そして、仕事に終始するだけでなく、精いっぱい私生活を充実させながら「明日も頑張ろう」という思いが、演者やフロアからも伝わってきた。結論。だから、CRC はやめられないのである。

